



THE ULiCS TIMES

う り く す ・ タ イ ム ズ

V o l . 7

大学図書館 学生協働交流 シンポジウム —in— 島根大学



2019年9月5日、6日に島根大学で第9回大学図書館学生協働交流シンポジウムが開催され、全国約20の大学から図書館に関連した団体に所属する学生や職員が参加した。「ワクワクする図書館をつくらうー”やりたい”を形にー」というテーマのもと、参加者が自団体での取り組みや活動に関する悩みなどを発表し、図書館の在り方について話し合った。ULiCSからは職員1名、学生2名が参加した。1日目の内容はポスターセッションと、カフェのようにリラックスした雰囲気の中で対話するワールドカフェ。2日目は1日目のワールドカフェの内容も踏まえてワークショップが実施された。また、島根大学・島根県立大学の図書館も見学した。



THE ULiCS TIMES Vol. 7

2020年4月1日(水)

神戸大学附属図書館学生チームULiCS

<https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/>

1 日目のポスターセッションは2チームに分かれ、交代で発表・聴講をするという形式だった。ULiCSの発表では、今年度力を入れて取り組んだビブリオバトルや、他団体であまり見られなかったLINEスタンプについて興味をもって聞いてもらえた。また、他団体の発表では本の福袋や、読んだ本の感想を共有するコーナー、地域の図書館との連携など、参考にできそうな取り組みをもたくさん知ることができた。また、他の団体でもメンバーの確保やイベントの広報について悩みを持っていることが分かった。

2 日目のワークショップは、それぞれが「ワクワクする図書館」を実現するためのアイデアを持ち寄り、グループごとの意見交換を通じてより精度の高いものにしていくという形で行われた。図書館での宿泊や宝探しなどのイベントや、本が原作になっている映画の上映会、図書館アプリの開発など枠にとらわれないアイデアがたくさんあり、活気に満ちたディスカッションとなった。二大学の見学でも神大図書館とは違う点が多く新鮮であった。



改めて大学図書館の持つ可能性を感じられた2日間だった。本や図書館が好きな参加者たちと話せたことが何よりも楽しく、次の機会にもぜひ参加したいと感じた。

(医学部2年 内田)

ビブリオバトル

全国大学地区予選



神 戸大学附属図書館学生チームULiCSは2019年10/28(月)5限、鶴甲第1キャンパス1階ラーニングcommonsにて知的書評合戦ビブリオバトルを開催した。ビブリオバトルとは「本を通して人を知る、人を通して本を知る」がキャッチフレーズのスポーツのような書評会のことである。ルールを簡単に説明すると、発表者が1人5分で1冊おすすめ本を紹介し、観戦者をはじめとした参加者全員で短くディスカッションを行う。その後参加者全員1人1票で最も読みたくなった本に投票し、＜チャンプ本＞を決定するというものである。ちなみにビブリオバトルのビブリオはラテン語で「書物」を意味する語が由来だそうである。

ビブリオバトルの開催はULiCSとしては2回目となるが、なんと今回は全国規模の大会「全国大学ビブリオバトル2019～首都決戦～」の関西Aブロック地区予選としての開催である。優勝者は甲南大学にて開催される地区決戦へ出場することができ、さらにそこで勝ち残ると東京で行われる首都決戦に出場することができる。

今回バトラー（発表参加者）を務めたのは4名で、神戸大学の学生だけでなく他大学の学生も参加した。当日はバトラー、ULiCSメンバー、図書館職員、観戦者併せて参加者数計22名での開催となった。紹介された本は次の4冊である。



- ①『夫婦で行くバルカンの国々』（清水義範著）
- ②『花のない花屋』（東信著 椎木俊介写真）
- ③『里山資本主義：日本経済は「安心の原理」で動く』（藻谷活介、NHK広島取材班著）

- ④『文系と理系はなぜ分かれたのか』（隠岐さや香著）

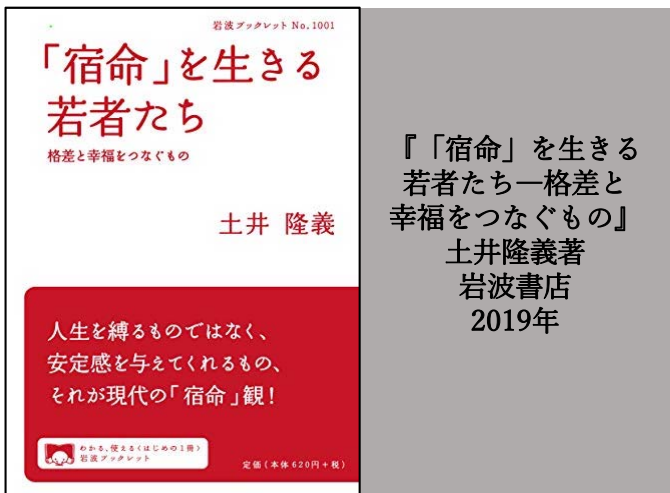
地 区予選としての開催、そしてULiCSとして2回目の開催ということもあってかバトラー、観戦者共にビブリオバトル参加経験者も多く非常にレベルの高い発表、ディスカッションが行われた。旅行記『夫婦で行くバルカンの国々』の紹介では本との出会い、内容、おすすめのポイントなどが丁寧に語られ、旅行記としての魅力がよく伝わる発表が行われた。『里山資本主義』の発表では本の一節と試験の問題文で出会ったエピソードを冒頭に語り、導入部から一気に観客を引き込んでいた。新書『文系と理系はなぜ分かれたのか』では固定観念を覆す一冊という切り口から本のおもしろさを訴える発表が行われた。バトラーごとに個性豊かな発表が行われ、白熱したバトルとなったのが最終的にチャンプ本となったのは『花のない花屋』だった。見開きごとに文章と写真が載るという構成で装丁も美しい本である。話題が豊富な発表で、ディスカッションも大変盛り上がっていた。

▶発表の様子。
ビブリオバトルではレジュメやパワーポイントなどのプレゼンテーションツールを一切使わずに発表する。



地区予選としては初めての開催であったが大きなトラブルもなく無事終了し、バトラー達の熱意あふれる本紹介を聞き、観戦者の方々と共にディスカッションに参加する楽しい時間を過ごすことができた。本が好きな人は多いが、本への思いを大勢へ発表したり、他の人と本についてディスカッションして刺激を受け合ったりする機会は大学内でもなかなかないものである。そういう意味でも本ビブリオバトルは貴重で有意義なイベントであったと思う。なお、紹介された本は全て神戸大学の図書館に収蔵されている。どれも素晴らしい本なので興味を持った方はぜひ図書館で手に取って読んでみてほしい。

（工学部3年 竹内）



『「宿命」を生きる
若者たち—格差と
幸福をつなぐもの』
土井隆義著
岩波書店
2019年



『ニュークリア・エイジ』
ティム・オブライエン著
村上春樹訳
文芸春秋
1994年

私の存在意義は何？

一般的な幸せとは何だろうか。数十年前は、新卒で入社した企業に定年まで勤めながら結婚をして、妻が専業主婦として子どもを生み育てる、というのが日本人男性の典型的な幸せな人生であると、社会全体に共有されていただろう。しかし、現在ではそれを実現させるのは難しくなり、必ずしも幸せなものではないと考える人々は増えた。

「グローバル化により、価値観の多様化がすすんだ」「多様な価値観を認めよう」最近、よく言われる。価値観が多様で良いという風潮が広まることによって、従来の基準で息苦しい思いをした人々は、自分なりの基準に沿って生きることが可能となり、ずっと生きやすくなっただろう。しかし、かつてあった一般化された価値観に沿って生きる「はずだった」人々は、よすがを失って宙ぶらりんな状態になってしまった。その人々とは、私たち一若者だ。私たちは将来の選択肢をいくつも持っている。けれど、どの選択肢が正しいかがわからず、立ちすくんでしまう。急速な流動化が進み、この先に期待できない社会で。そこで自身の周囲、すなわち他者からの評価という相対的なものにすがる。そして、今は「宿命」に変容しつつある、と筆者は指摘する。かつて「宿命」は、地縁・血縁のように自身を縛り付け、自由に生きることを制限するものであった。けれど、現在の「宿命」は、過去から自身を、その存在を基礎づけるものとなった、と（※詳しくは本書で）。

本書を読むことで、私たちの生き辛さが解決されるわけではない。けれど、言葉として説明されることによって、モヤモヤとした状態を脱する手がかりにはなると思う。

ちなみに、本書は岩波ブックスという一種の文庫のようなもののひとつだ。岩波ブックスは、様々な社会的なテーマを扱い、基本的に1cm未満の厚さだ。とはいえ、内容は濃く、とても分かりやすい。読み切りやすいので、忙しい学生生活の合間にも手に取ってみてほしい。

(法学部3年 水田)

安全第一

ベトナム戦争は実に多くの人を狂わせた戦争だった。もちろん、どの戦争であっても多かれ少なかれそういう側面はある。しかしこの米ソ冷戦のもとで泥沼化した全面戦争の混迷ぶりは他に類を見ず、先のない閉塞感は徴兵された若者だけでなく多数のアメリカ人の心を蝕み、その行き場のない狂気はのちの映画、音楽、小説などの文化作品にも次々と伝染した。キューバ危機から誰もが秒読みしていた「世界の終り」のモチーフを、人々はそれらの物語に組み込んでいたのである。

本作の著者ティム・オブライエンも恐らくその一人だ。主人公のウィリアムは冒頭で自分の家の庭に穴を掘り始める。核戦争から身を守るための、シェルター用の穴である。娘が隣でどれほど呼びかけても、ウィリアムは一向に掘ることをやめようとしな（作中の時代設定は1995年だが、原著が出版された時点ではまだ冷戦は終わっていない）。彼に植え付けられたパラノイアの源泉を探る形で、物語は50年代まで遡る。モンタナ州の片田舎で一見平和に、しかしライフ誌で見た水爆の写真に怯えながら過ごしたセンシティブな少年時代、そして転換期となった大学時代。彼は大学でユニークな友人たちと奇妙な団体を結成し、ベトナムの反戦運動のために奮闘する（この辺りの描写は青春小説としても良く出来ており、全体的に熱暴走気味の作品内で唯一清涼感を与えてくれる）。やがて彼と彼の仲間は、70年代以後の大きな時代のうねりの中に飲み込まれていく。

ウィリアムが一貫して求めているのは戦争を含むあらゆる暴力から隔離された安全地帯だ。『地獄の黙示録』でマーロン・ブランドがジャングルに築いた王国を今、彼は自分の庭に作り出そうとしている。かつての高校の教室で、頭痛と便秘で倒れたウィリアムをヒロインである女の子が風を扇いで介抱する場面がある。可笑しくも切ない一幕だ。その胸中の吐露がすこぶる真に迫っているのが最後に抜粋する。

「僕は殆ど笑いだしそうだった。なんで風なんかいるもんか。僕が欲しいのは平和なんだ」

(p. 78)

(職員 山下)

電子書籍元年とやら紙の本は絶滅するとやら言われてはや10年です。僕はまだ図書館といえば紙の本というイメージなのですが、電子資料は神戸大学図書館でも大きな位置を占めているようです。何しろ図書館のウェブサイトで公開されている年次報告で10年(2009 - 2018年)の変化を垣間見ると、なんと図書購入費は半減、2009年に初めて図書購入費を超えた電子資料費は年々増加を遂げ、今や図書・雑誌・新聞を足しても届きません。紙の本は歴史による蓄積があるとはいえなんとも驚きです。

さて、図書館が提供する電子資料の内容は図書館ウェブサイト→コレクション→電子リソースリストから確認できます。基本的に研究者向けで英語のものが多く、学部生としては利用しにくいものが多い感じですね。でも一般向けの電子書籍も数は少ないですが一応あるのでちょっと見てみましょう。使用するのはMaruzen eBook Library (<https://elib.maruzen.co.jp>)というサービスです(新入生の方へ: 情報基礎の初回授業で配布されるアカウント通知書を受け取っている必要があります)。学内限定のコンテンツなので自宅からアクセスする場合は、アカウントを大学で作っておくか、VPNで学内ネットワークに接続しましょう(VPNの使い方は情報基盤センターのウェブサイトに記載されています)。

新入生への 図書館 案内

#図書館で電子書籍

トップページに並ぶ本はほとんど読めないの
で無視して、購読契約タイトル一覧をクリック。
古い雑誌を除けば数百タイトルと、神戸大学
図書館の蔵書数が380万冊あるのを鑑みると物量
不足は否めませんが、評判の良いブルーバック
スやTOEIC対策書、多読用英語リーダーなど、な
かなか読みたくなる本が揃っています。一部の書籍
はオフラインにPDFとしてダウンロードが可能です。
ただし一度にダウンロードできるページ数には制限
があるのですが……。読み終わるたびに続きをダウ
ンロードすることは可能ですし、それらをオフライン
で結合するという手もありますね(PDFの結合は図書館
のMacなら標準アプリのプレビューでできます)。
正直、ブラウザから読むのは若干使いづらいですが、
PDFにさえできれば普通の電子書籍と変わりありま
せん。一部図書館ではiPadの貸し出しも行われて
るので、存分に使っていきましょう!(工学部2年 原田)



ULiCS
メンバー募集中!